

## 西海合戦と源頼朝

宮田敬三

### はじめに

元暦年間の瀬戸内海地域には、鎌倉御家人土肥実平・梶原景時の軍兵、関東から遠征していた源範頼軍、院宣を奉じて京都から出陣した源義経軍などが官軍として展開した。これらの軍勢と平氏との戦いを源頼朝からの視点ではどのように論じられるだろうか。本稿では以下の問題点を考察したい。

第一に、一ノ谷合戦後から範頼が出陣するまでの再検討である。この間には、追討戦の休止とも解釈できる兵糧米の停止や、瀬戸内海地域での戦闘があった。義経の出陣が延期されて範頼軍が出陣する経緯を、後白河法皇の思惑も想定して再考する。

第二に、頼朝が義経の出陣を知って以後、どのような対策を立てたかである。検討材料の一つとして中原久経・近藤国平上京がある。この事件について田中稔氏は「頼朝は義経に屋島にある平氏の追討を命ずると共に、直ちにその後を受けて京都の治安維持に当るべき者の選考を行い、遂に久経・国平を遣すことに決定した」と述べた。これ以後、義経の行動の背景に頼朝の意向を想定し、久経・国平を義経に代わる治安維持担当者とする評価が相次いでいる。<sup>④</sup>しかし頼朝が義経に命令した時期や内容は明らかにされていない。頼朝が西海合戦中どのような指令を発し

ていたか考えてみたい。

第三に、壇ノ浦合戦後、頼朝によって義経になされた官職補任推挙、所領没収、刺客派遣など、相反する評価の説明である。この間の推移について、頼朝が義経の戦いに激怒し、両者が対立することを主に述べられる場合も多い。<sup>⑤</sup>しかし壇ノ浦合戦を伝え聞いてから義経が挙兵するまで六ヶ月間ある。深刻な対立が生じているならなぜ義経が鎌倉に来たときに斬らなかつたのかという疑問も成り立つ。そのための説明は、義経を挙兵に追い込むための挑発でなされてきた。<sup>⑥</sup>ところが最近では、義経一憲氏が土佐房昌俊による暗殺未遂事件において頼朝による先制攻撃を疑っている。<sup>⑦</sup>また元木泰雄氏は、壇ノ浦合戦後に頼朝と義経の関係が破綻していたのではなく、頼朝は伊予守補任を通して義経を鎌倉に居住させようとしたが、義経は後白河院の権威を背景に検非違使に留任し京都に留まったため、両者は決定的な破綻を向かえたと述べている。<sup>⑧</sup>私は、平氏との戦いが追討戦であったことと、西海合戦に御家人が多く参戦していたことの両面に留意して考えてみたい。

なお、第一、第二、第三は、計画、実際、事後ともいいかえられる。そして、さらに後年どのように西海合戦の経過が説かれるかも問題となる。<sup>⑨</sup>

## 一 平氏追討をめぐる後白河法皇との駆け引き

一ノ谷合戦後、頼朝は義経による平氏追討を奏上した。しかし兵糧米は停止され、義経の出陣は延期となり、平家没官領が頼朝に与えられた。平家没官領は研究史上では関東御領や荘郷地頭成立史の関心から着目されてきたが、ここでは兵糧米の供給源という意味で、追討戦との関わりについて考えたい。

寿永二年（一一八三）七月、源義仲軍が平氏軍を破って入京すると、朝廷においてその兵糧をどのように調達するか議題となった。藤原忠親と藤原長方は賜国を述べ、藤原兼実は没官地（領）を宛てるように提案している。没官領は八月に義仲や源行家等に分け与えられた。そして十一月の法住寺合戦後、義仲によって惣領されるようになった。

同時期の頼朝は軍勢を京上させることに消極的だった。寿永二年の東国では飢饉があつたので、兵糧確保を不安視していたからである。その頼朝が同年末に義仲と平氏を討伐する兵を西上させ、宇治川、瀬田川、三草山、一ノ谷などで各勢力を敗退させた。一ノ谷合戦後の元暦元年（一一八四）二月に、東国の兵士ではなく畿内近国の兵力による平氏追討を朝廷に提案したのは当然といえよう。

しかし前述のとおり頼朝の提案は採用されず、二月二十二日に兵糧米の徴収を全国的に停止する宣旨が下され、月末には義経の出陣が延期された。その後まもなくの三月七日、平家没官領が後白河法皇より頼朝に与えられたのである。

以上の経緯から考えられることとして、平家没官領を頼朝に与えた院方の意図がある。兵糧米徴収停止と義経出陣延期を行って平家没官領を頼朝に与えているのであれば、法皇は東国武士の西進を望んでいたと考えられる。おそらく、平氏や義仲の在京期のように京都に大軍が集めら

れるとまた狼藉が引き起こされるため、同じ事態のくり返しを避けたかったであろう。新しく在京する義経は、兵糧米や武士の狼藉を停止する文書を発給している。これは彼の個性だけでなく、平氏や義仲とは違つて大軍を集めて下向する大將軍に位置づけられていなかったことも一背景として考えられる。

では頼朝はどうしたかという点、二月十八日には梶原景時と土肥実平に播磨・美作・備前・備中・備後の五ヶ国を「守護」するように命じている。三月八日には板垣兼信と土肥実平が西国へ下向した。西海の平氏に対しては大規模な作戦をとろうとしない。当面防御が方針とされたようである。

東国では五月、源義高（義仲の子）与党の討伐を実行した。正月二十九日には義仲余党の逮捕を命じる宣旨が頼朝に下されていた。義仲は平家没官領を前に与えられた武士でもある。残存勢力を掃討しなかったであろう。この作戦には、和田義盛・比企能員を指揮官とする相模・伊豆・駿河・安房・上総の御家人、甲斐国へ向かう足利義兼・加賀美長清軍、信濃国へ入る下野（小山・宇都宮）・武蔵（比企・河越・豊島・足立）・上野（吾妻・小林）の御家人が動員されている。つまり東国での地盤固めのためには大きく兵を動かしているのである。

六月以降、西海地域では平氏が勢いを盛り返した。この事態を受けて頼朝は、七月三日に再び義経を西海の平氏追討使に推挙した。これも畿内近国の兵力に基づく構想だったと推測される。しかし七月に伊賀・伊勢でも平氏勢力が蜂起した。八月三日、京中の平氏方搜索を義経に命じているので、このころには義経の西海出陣を断念したと思われる。

同月六日には義経が検非違使・左衛門尉に任官した。法皇に義経を出陣させるつもりはなかった。親衛隊を温存したかったのであろう。義経任官の連絡は同月十七日に鎌倉に達した。

以上のように、東国の兵を出させたい院方と、出たくない鎌倉方との駆け引きを経て、西海へ下向する大將軍は範頼となった。寿永二年後半より頼朝は関東勢の遠征に消極的だったのだから、これは重大な変更である。八月八日、範頼軍は鎌倉を出陣し、二十七日に京都に到着し、九月二日には西海に向けて発向した<sup>27)</sup>。小山朝政は遅れて九月二日に鎌倉より出陣している。これは元來兵が出されようとしていなかった事情の一端を示しているのかもしれない。

義経と範頼は頼朝から命令を受けるだけでなく、八月の末にそれぞれ朝廷より官符を給わった<sup>28)</sup>。追討使頼朝の下、宗盛の追討は範頼、京都の守護は義経と、朝廷の下でも代官による分担が認められた。この関係は後の恩賞問題を考える際にも重要である。

『平家物語』諸本によると、山陽道を進した範頼軍は九月下旬に備前国藤戸で平氏方と合戦し勝利している<sup>29)</sup>。『吾妻鏡』では、十月十二日に安芸国で勲功賞が宛がわれた。同地域では寿永二年に水島(備中国)・室山(播磨国)で官軍が平氏軍に連敗し、元暦元年にも鎌倉御家人の土肥実平・梶原景時が苦戦をくり返していた。これらの事実をふまえると、範頼軍は戦局を大きく転換させたと言わなければならない<sup>30)</sup>。

ところが官軍の兵糧米や兵船が欠乏するようになり、十一月、範頼はその援助を頼朝に要請した<sup>31)</sup>。翌文治元年(一一八五)正月六日頼朝書状はその返事にあたる。この書状には、安徳天皇・平時子の降伏期待、平宗盛の生け捕り、東国武士に九州武士を加えた四国攻め、二月の兵船出航など、戦略に関わる内容が記されている。ここではそれらを部分的に補足しながら、軍勢を西進させるように変更した(先述)背景を探ってみる。

まず、安徳天皇・平時子に降伏を期待する内容である。これは安徳を調伏していた院方と明らかに相違している。後白河が義経(頼朝の弟)を

登用したのに対し、頼朝は安徳(後鳥羽の兄)を保護しようとした、という表現も可能である。院の恣意を掣肘する手段として考えられていたのではなからうか<sup>32)</sup>。

次に、四国攻めに関する内容については史料を引用する。

A 『吾妻鏡』文治元年正月六日条

① 坂東の勢をばむねとして、筑紫の者共をもて、八嶋をば責させて不<sup>レ</sup>忿やうに、閑に沙汰候べし。(丸数字・傍線宮田以下同)

② 参河守向<sup>二</sup>九国<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>九郎判官<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>遣<sup>二</sup>四国<sup>一</sup>也。爰平家縦雖<sup>レ</sup>在<sup>二</sup>四国<sup>一</sup>、雖<sup>レ</sup>着<sup>二</sup>九国<sup>一</sup>、各且守<sup>二</sup>院宣旨<sup>一</sup>、且随<sup>二</sup>参河守下知<sup>一</sup>、令<sup>二</sup>同心合力<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>追<sup>二</sup>討件賊徒<sup>一</sup>也(後略)

① 東国武士を主力として九州武士を加えるという内容は、戦力補強と文字通りに解釈できる。もともと畿内近国の兵力による追討を考えていたのを変更して、東国御家人を派遣したからである。九州武士の動員は、追討が成功した場合、御家人編成にもつながる。

② は書状に副えられた下文からの引用である。波線部については、中村善雄氏が、義経を四国の屋島に平家追討のためにすでに発向させたという過去形の決定的意思表示とは受け取りにくいと述べている<sup>33)</sup>。続く実線部分では平家が四国にあつても九州に着いても範頼の命令に従って討伐するように書かれている。

書状の内容は山陽地方で優勢を築いた範頼への返書としてふさわしい。頼朝が立てた作戦の遂行のため兵糧米と兵船の補給が企図されていたのである<sup>34)</sup>。

## 二 範頼による追討の挫折

文治元年(一一八五)正月一日、新大夫判官義経が院・内に参じた。共

の衛府として六名が挙げられ、武士一〇〇騎ばかりも揃えられている。これは「于<sub>レ</sub>今平家有<sub>二</sub>四国<sub>一</sub>、余散有<sub>二</sub>洛陽<sub>一</sub>、仍所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>用心<sub>一</sub>也<sup>⑤</sup>」とおりの、平家の残存勢力を警戒してのことであった。だが同月八日、義経は四国への下向を院に奏上した<sup>⑥</sup>。範頼軍の兵糧欠乏を聞いて戦いを早く終わらせようと決意したのである。藤原忠清在京の風聞などにより郎従派遣の意見があったが、法皇は発向を許可し、義経は十日に京都から出てしまった<sup>⑦</sup>。

この事件に頼朝はどのように対応したのだろうか。

京都と鎌倉の連絡は最速で三日か四日、平均して七日前後を要した<sup>⑧</sup>。だとすると義経が出陣した事実は正月二十日頃には関東へ伝わったはずである。その十日以上経た後の二月五日に中原久経と近藤国平が鎌倉より出発した。この事実経過では久経・国平を義経の後任と評価しにくいのではなからうか。

また、両人の職務は院宣に随って武士の狼藉停止を使命することにある。これに対し在京時の義経の職務は、京都の治安維持、御家人に対する指揮、荘園での狼藉事件に関する裁判などと、多岐にわたっていた<sup>⑨</sup>。久経と国平の役割は荘園での狼藉事件に関する裁判に限定されている。両人は指したる大名ではないので京都の守護にも堪えられない。職務内容が同じとはいえない。

さらに、対応を推定する材料として範頼への指令を付け加えたい。

B 『吾妻鏡』 文治元年二月十四日条

参州日來在<sub>二</sub>周防国<sub>一</sub>之時、武衛被<sub>二</sub>仰遣<sub>一</sub>云、令<sub>レ</sub>談<sub>二</sub>于土肥<sub>一</sub>二郎・梶原平三、可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>九国勢<sub>一</sub>。就<sub>レ</sub>之、若見<sub>二</sub>帰伏之形勢<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>九州<sub>一</sub>。不然者、与<sub>二</sub>鎮西<sub>一</sub>不可<sub>レ</sub>好<sub>二</sub>合戦<sub>一</sub>、直渡<sub>二</sub>四国<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>攻<sub>二</sub>平家<sub>一</sub>者。

周防国まで進んだ頃の範頼軍には土肥実平・梶原景時と相談して九州を攻めるか四国を直接攻撃するか判断を任していた(B)。ところが範頼

軍は九州へ渡ろうとしたが船がなくて進めず、長門国に移動し、糧が尽きたので周防国に戻り<sup>⑩</sup>、軍士達の戦意低下を嘆く飛脚を發した。その状況を知らせる飛脚が二月十四日に鎌倉に到着したので、頼朝は兵糧を待つて追討戦を続行するようにと範頼と御家人を励ます書を遣わした。当日には義経の出京を知っていたはずであるが、範頼軍による平氏追討を変更していたとは認められない。

以上をまとめると、頼朝は、義経が出陣したと知っていた二月五日、さほどの大名ではない久経・国平に武士の狼藉を停止する任務を与えて鎌倉を發たせ、十四日には範頼に兵糧を待つように伝えた、となる。

これらをつまえて頼朝は出陣した義経をどうしたのか考えてみると、本来の任務である京都守護に復帰させたかたのではありませんか。義経の職務の一つが久経・国平に委ねられ、義経の負担が軽減されることにより、京都の守護が強化されると考えられるからである。範頼による平氏追討の継続とも矛盾しない。

右の推定は院方の動向とも関係する。五日に両人が鎌倉を發したのであれば十五日頃に入京したと考えられる。『玉葉』と『吾妻鏡』の二月十六日条には院近臣高階泰経が摂津国渡辺へ下向し京中武士の不足などを理由として義経の渡航を制止しようとした事件が記録されている。法皇は、久経・国平の上京をきっかけとして、義経に発向を思い止まらせるため泰経を下向させたとは考えられないだろうか<sup>⑪</sup>。院方は親衛隊の温存、頼朝は作戦遂行と、それぞれ思惑は違うが義経を在京させておきたい点では双方の考えが一致したと思われるからである。

しかし義経は四国へ渡り、二月十九日、平氏軍を屋島から海上へ追った。

三月八日には義経の飛脚が鎌倉に入った。その報告によると、同軍は二月十七日に渡辺から出船して、翌朝阿波国で平家方と戦って勝利し、

讃岐国屋島へ向かったという。

翌日の九日には範頼から連絡があった。この日の条文には史料批判が必要である。

C 『吾妻鏡』文治元年三月九日条

参河守自「西海」被「献」状云、①就「為」平家之在所近々、「相構着」豊後国「之」处、民庶悉逃亡之間、兵粮依「無」其術、「和田太郎兄弟・大和多二郎・工藤一臈以下侍数輩、推而欲」帰参「之間、枉抑」留之、「相伴渡海畢。猶可」被「加」御旨「一」歟。②次熊野別当湛増依「廷尉引汲」、「承」追討使、「去比渡」讃岐国、「今又可」入「九国」之由有「其聞」。四国事者、義経奉「之」、九州事者、範頼奉「之」处、更又被「抽」如「然之輩」者、匪「啻失」身之面目、「已似」無「他之勇士」。人之所思、尤為「恥」云々。

①では範頼軍の九州上陸（正月二十六日）が伝えられている。範頼は、豊後国に着いたところ「民庶」が逃散したため兵粮米が不足し、和田義盛以下数輩が帰参したが「つたのを留めたと伝え、さらに指示を仰いでいる。以上の内容からは特に疑問は生じない。

②によると熊野別当湛増が義経の引級によって追討使となり讃岐に渡り九州に入ろうとしていたという。『吾妻鏡』二月十九日条には義経による屋島攻撃、同二十一日条には湛増の義経軍への合流が記されているので、それらの内容が②に記述されているかのようである。しかしこの解釈には難点がある。なぜなら九州で範頼がこの「聞」を真に受けたとすると、義経より先に湛増が讃岐へ渡ったと想像したことになるからである。湛増の行動が九州の範頼に伝わるには数日かかり、それを範頼が鎌倉へ連絡するにも約一ヶ月を要する。そのため遅くとも二月初頭に湛増が讃岐へ渡ったと範頼が思っていなければ、②は彼からの連絡として三月九日に鎌倉へ到着しない。<sup>④</sup>

そのような内容に続けて、四国は義経、九州は範頼と、攻撃地域が分担されていたかのような②波線部がある。一で述べたとおり頼朝は東国武士と九州武士による四国攻撃を考え（A①）四国を攻撃するべきか否かの判断も範頼に委ねていた（A②実線部・B）。そうだとすると範頼の方から四国と九州といった分担を言い出すとは考えられない。

義経と範頼からの連絡を得て、頼朝は、十一日、十二日、十四日とたてつづけに命令を発した。

十一日には範頼への返書が出された。同日条ではC②に関わる返答が「湛増渡海事、無「其実」とだけ書かれている。範頼の問い（C②）に比べてその答えの文字数は激減している。C①の応答では千葉常胤の大功を特に褒め、北条義時以下一二名と伊豆・駿河等国御家人の功を賞している。人名は一致していないが、C①と対応するように具体的に記されている。

十二日には、兵船三一艘に兵粮米を納め早く出港させるように命じた。兵船と兵粮米の補給は、正月六日書状では二月十日頃と約されていたが、一ヶ月遅れて実行された。平家没官領などから捻出された兵粮米が積み込まれたのであろう。

このように兵粮米の発送が遅れるのは、飢饉のうえに軍事動員が続けられ東国諸国が疲弊していたためと考えられる。頼朝方の軍事行動だけに限ってみても、下向してくる官軍に対する迎撃や、上京軍、源義高与党討伐軍などの派遣がくり返された。そのつど東国の人民・百姓は兵粮米を課せられ軍役を強いられたのである。こうした状況は武士の士気にも影響したに違いない。御家人が東国を恋しく思ったり、壇ノ浦合戦後範頼より先に東国に帰るなどの言動の背景には、遠征というだけでなく元暦年間固有の事情もあったと思う。<sup>⑤</sup>

十四日には、書状を持たせて使節を下向させ、追討に遠慮を廻らすべ

きことと、賢所ならびに宝物等を無為に返し入れるべきことを範頼に伝えようとした。すでに屋島は義経によって攻められたので、平氏を降伏させる作戦は絶望的になっていた。

十一日、十二日、十四日と連続して指令が発せられたのは、九日の範頼飛脚に応えたいだけでなく、八日に義経の飛脚が到着し、自分の意図と違った戦いが発生していると知ったからに違いない。頼朝は九州武士の動員も(A①)範頼による四国攻めも(A実線部分・B)できなくなっていた。そのような中、少しでも自らの構想に近づけて追討戦を終わらせようと努力していたのである。しかしこれらの命令が範頼に届く以前の二十四日、義経が壇ノ浦で平氏を滅ぼしてしまった。安徳と時子は入水し、神器の一つ宝剣が失われた。成功したのは宗盛父子の生け捕りぐらいである。④ 範頼による四国攻めは義経のために挫折した。

### 三 義経への賞と刺客

義経からの戦勝報告は、四月三日に京都、十一日に鎌倉へもたらされた。頼朝は合戦の様子を使者に詳しく尋ね、翌十二日、範頼にはしばらく九州に留まって戦後処理をするように、義経には生虜等を伴って京都に帰るように飛脚を發した。十四日には高階泰経からの使者が鎌倉に着き、「追討無為、偏依<sub>二</sub>兵法之巧<sub>一</sub>也」と賞された。二十七日には追討賞として正四位下より従二位に叙された。④

これらの経緯から判断すると、頼朝は平氏追討に功績を挙げたと朝廷より認められている。『吾妻鏡』文治元年(一一八五)八月二十九日条には「義経朝臣官職事(中略)去四月之比、内々被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>泰経朝臣<sub>一</sub>畢」とある。おそらく四月の泰経の使節に應えて頼朝が義経を推挙したのである。追討使頼朝が賞されたのであれば追討を実行した代官義経も評価さ

れなければならぬからである。

ただし合戦の実際に頼朝が納得したわけではない。

D『吾妻鏡』文治元年四月二十一日条

判官殿<sub>ハ</sub>為<sub>二</sub>君御代官<sub>一</sub>、副遣御家人等<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>合戦<sub>一</sub>畢。而頼雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>一身之功由<sub>一</sub>、偏依<sub>二</sub>多勢之合力<sub>一</sub>歟。(中略)

凡和田小太郎義盛与<sub>二</sub>梶原平三景時<sub>一</sub>者、侍别当所司也。仍被<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>遣舍弟<sub>一</sub>、兩將於<sub>二</sub>西海<sub>一</sub>之時、軍士等事為<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>義盛於<sub>二</sub>参州<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>景時於<sub>二</sub>廷尉<sub>一</sub>之处(後略)

二十一日、景時より書状が届いた(D)。それによると、義経は頼朝の代官として御家人を副えられ合戦をしながら自分一人の功績のように思っており、鎌倉殿の嚴命と違っている旨を言っても却って仇となるので早く帰参したいという。続く地の文では、範頼と義経の両将には和田義盛と梶原景時が侍所として付けられ、範頼は義盛等と相談したのに対し、義経は「自専」「雅意」に任せたので人々から恨まれたとの解釈が記されている。

二十四日には範頼より三河国司の辞状が届いた。壇ノ浦合戦での結末をふまえ、役割を果たせなかったため職の辞退を判断したと想像される。頼朝の返事は記されていない。

義経、泰経の使者、景時、範頼等から連絡を得て、頼朝は西海合戦をどのように説明するようになったらうか。それが義経を鎌倉で斬らなかつた理由を考える手がかりにもなる。義経と範頼への対応の違いにも注意して以後の経過をみていきたい。

E『吾妻鏡』文治元年四月二十九日条

雑色吉枝為<sub>二</sub>御使<sub>一</sub>赴<sub>二</sub>西海<sub>一</sub>。是所被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>御書於<sub>二</sub>田代冠者信綱<sub>一</sub>也。廷尉者、為<sub>二</sub>関東御使<sub>一</sub>、相<sub>二</sub>副御家人<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>差<sub>二</sub>遣<sub>二</sub>西国<sub>一</sub>之处、偏存<sub>二</sub>自專儀<sub>一</sub>云々。侍等成<sub>二</sub>私<sub>一</sub>服仕<sub>一</sub>思<sub>二</sub>之間<sub>一</sub>、面々有<sub>レ</sub>恨云々。所詮於<sub>二</sub>向

後一者、存二忠於關東一之輩者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>隨三廷尉一之由、内々可<sub>三</sub>相触一云々。

頼朝は西海の田代信綱へ遣わす書状の中で義経を「関東御使として御家人を副えて西国へ差し遣わした」と表現している(E)。この書き方は屋島・壇ノ浦合戦が頼朝の意向によって行われたとも受け取れる。

そして侍等が私に服仕する思いをしたので恨みを持つていと述べた後「今後は義経に随つてはならない」と御家人に知らせるように伝えている。四月十二日には生虜を具して上洛するように義経に飛脚が発せられたのだから(前述)、御家人達の義経への協力も認められていたはずである。さらに五月四日には、景時の使者が鎮西に戻るにあたって、義経を「勘発」したと明言し、景時以下の御家人が平氏の生虜を警護するようにも変更した。十二日に発した義経への命令はその十八日後から変更され始めたのである。

この変更の背景として、一つには御家人からの連絡により独断で進めた合戦の様子が次第にわかったことが考えられる。もう一つ考えられるのが合戦後の義経の行動である。義経は鎌倉からの連絡が着く以前に帰京の途に付き、<sup>49</sup>二十四日に京都に凱旋した。その行動が四月二十九日・五月四日頃(日付を確定できないが)から鎌倉に伝え聞かれ、帰京命令にすら応じないのが明らかになったので頼朝は義経を責めるようになったのではなからうか。

これに対し頼朝へは、五月五日、宝剣の探索など冬までに諸事に当たるように指示し、御家人が背くことがあっても私に勘発してはいけないと命じている。追討計画をほとんど実現できなかった頼朝には指令を出しているのである。続けて次の記事がある。

F『吾妻鏡』文治元年五月五日条

去年之比、為<sub>二</sub>追討使<sub>一</sub>、二人舍弟<sub>義経</sub>蒙<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>訖。爰<sub>三</sub>參州入<sub>三</sub>九

西海合戦と源頼朝

国<sub>一</sub>之間、可<sub>レ</sub>管<sub>三</sub>領九州之事<sub>一</sub>、廷尉入<sub>三</sub>四国<sub>一</sub>之間、又可<sub>レ</sub>支<sub>三</sub>配其国々事<sub>一</sub>之旨、兼日被<sub>レ</sub>定処、今度廷尉遂<sub>三</sub>壇浦合戦<sub>一</sub>之後、九国事悉以奪沙<sub>三</sub>汰之<sub>一</sub>。

F破線部では、追討使として頼朝と義経が院宣を蒙ったと記されている。波線部では、頼朝が九州へ義経が四国へ入ったので各分担当が決められたかのように記されている。そして義経は九州の事にも関わるようになり、「雅意」に任せて御家人に勘発を加えたりしたので、頼朝の怒りを買ったと説かれている。

五月七日には京都から義経の使者が鎌倉に参着し、頼朝に対し異心がない旨を記す起請文を献じた。しかし頼朝は、頼朝が事ある毎に飛脚を進めたのに対し、義経はややもすると「自專計」があったので許容できず、かえって忿怒の基になったという。当然返事は記されない。翌八日には和田義盛が西国御家人の交名を作成するなどの条々が定められた。頼朝へは、九日に原田の所知を勲功者に分かち充てるように命じ、十二日には書状を遣わしている。

五月七日の京都では義経と藤原能保が鎌倉に向けて出発した。<sup>50</sup>十一日には頼朝が従二位に叙されたことを能保が鎌倉に連絡している。十五日、酒匂宿にて宗盛父子を北条時政に向かえ取らせた。鎌倉に入れなかった義経は五月二十四日付けで腰越状を認めている。<sup>51</sup>六月七日、頼朝は宗盛と対面し、九日には橘馬允・浅羽庄司・宇佐美平次を付け宗盛を帰洛させた。

その五日後の十三日、義経に与えていた平家没官領をことごとく他人に改めたのである。そして、義経は代官として御家人を加えられていなければ平氏を討伐できなかったにもかかわらず、自分の大功であるかのように称し、帰洛にあたって関東に怨みを持つていている者は義経に属すように吐くのは奇怪だと忿怒したという。

『吾妻鏡』には怒っている様子が何度も書かれているが、正月の義経出陣が記されていないので、怒る理由がわかりやすいとは思えない。院宣を奉じて合戦し作戦を壊し帰京したのだから、所領を取り返すくらいの処置がなされても当然である。しかし鎌倉で斬るほどの処断はできない。なぜなら頼朝は追討の賞として従二位に叙され「関東御使」と御家人によって平氏を追討したと主張していたからである（E等）。自分は賞を得て追討の実行者を斬ったのでは、それは矛盾である。この時点では追討使頼朝と代官義経による成功を装う必要もあった。そのため義経にも代官としての務めを果たさせる一方で、西海合戦に関する弁明は一切受け付けず、鎌倉殿とその弟という関係で可能な限りの忿怒が表されたのである。

では、頼朝が義経へ刺客を送るきっかけは何だったのだろうか。次にはこれに留意して推移をみてみたい。

平宗盛・清宗父子は六月二十一日に近江国篠原で斬首された。義経はその首を検非違使庁に渡すか捨て置くか院宣に従うとの頼朝の意向を院方に伝えている<sup>52</sup>。二十三日、義経は入洛した。頼朝は義経からではなく橘右馬允等より宗盛父子の刑を七月二日に伝え聞いた。七月十二日には範頼を帰洛させることが決定し、本人に伝えた。

八月十六日に小除目があり、山名義範は伊豆守、大内惟義は相摸守、足利義兼は上総介、加賀美遠光は信濃守、安田義資は越後守、源義経は伊予守に任じられた<sup>53</sup>。鎌倉には二十九日に伝えられ、義経の任官について「彼不義等雖<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>露頭<sup>一</sup>、今更不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>申止<sup>一</sup>之、偏被<sup>レ</sup>任<sup>一</sup>勅定<sup>一</sup>と記されている。頼朝の本意でなかったのは明らかである。

ところで六月に藤原兼実は「九郎無<sup>レ</sup>賞如何。定有<sup>レ</sup>深由緒<sup>一</sup>歟。凡夫不<sup>レ</sup>覚得<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>」<sup>54</sup>と記し、義経に賞がないことに疑問を持っていた。兼実から見て、義経は平氏を討伐したのだから賞に与って当然なのである。義

経が任官して当然と考えられないとすれば、屋島・壇ノ浦合戦にある追討戦としての性格があまり考慮されていないからであろう。

九月二日には梶原景季と義勝房成尋が鎌倉より上洛した。その役割は、勝長寿院供養導師の布施と荘殿具の用意と、流罪にされるべき平氏が配所に赴かないことの抗議にある。さらに行家討伐を義経に命じさせて、その反応を探らせるようにした。

義勝房は布施等を調達して十月三日に帰参した。景季は六日に京都より帰参し、義経が行家の討伐に消極的だったことを伝えた。すると義経は行家に同意していると断定され、刺客を誰にするか群議がなされたが、辞退する御家人が続出した。九日になって土佐房昌俊の派遣が決定され、京都までの行程は九日と定められたという。

『吾妻鏡』に記されたこれらの義経暗殺計画は全て信じられるだろうか。

まず事実関係として注目できるのは景季・成尋を上洛させたタイムイングである。頼朝は勲功賞の手続きが終わったと知ると（八月二十九日）、直ちに義経を討伐する準備に取りかかった（九月二日）といえるからである。代官による追討の成功を主張しているため、義経へのさらなる処置を遅らせていたに違いない。数十騎規模の武士を遣わすという手段がとられたのは、義経と合戦になるのを防ぐためと考えられる。東国は疲弊しているので、頼朝が積極的に対立相手の挙兵を引き起こそうとしたとは考えにくい。

もう一つ、関係づけられるのが範頼軍の上洛である。九月二十一日、範頼からの使者が参着し、九月に入洛すると頼朝に報告していた。実際には九月二十七日に入洛しており、在京中には平氏が持ち出したものを院に返上するなどしている<sup>55</sup>。義経への襲撃は、範頼が追討使としての職責を果たして出京した後と計画されたであろう。ここでもまた代官によ

る追討との整合が図られたと思われる。昌俊の行程が九日と定められたのは、範頼の在京と義経への襲撃を確実にずらすためかもしれない。範頼は十月二十日に鎌倉に帰着し、前年八月以来の遠征を終えた。

反対に、信用しがたい内容も『吾妻鏡』にはある。同書によると、土佐房が派遣される直接のきっかけは、鎌倉に反した行家に義経が同意したからである。その行家の「謀反之志」は八月四日には発覚し、佐々木定綱に討伐が命じられたという。しかし定綱が十月二十四日の勝長寿院供養に出席していることなどから、行家の謀反発覚から討伐命令へという流れは疑わしい。<sup>56</sup>

だが『玉葉』十月十三日条には義経と行家が通交し反頼朝の行動していたと記されている。その日の条によると、両者の内議はすでに露顕し、義経が密かに頼朝追討を院に奏上したところ「頗有『許容』」という。そして奥州平泉の藤原秀衡の与力も噂されていた。同書十七日条によると、義経は十一日には行家を制止したと言っており、暗殺しようとする郎等が遣わされているとも伝え聞いていた。

はたして十七日には昌俊が義経を襲撃する事件が起こった。<sup>57</sup>しかし暗殺は失敗し、反対に昌俊が斬られた。そして十八日には頼朝追討宣旨が下されるなど、以後事態は急展開していくのである。

義経の伊予守補任後、暗殺が企てられたが失敗し、それがきっかけとなって頼朝と義経の抗争が避けられなくなった、という『玉葉』と『吾妻鏡』によって復元される大筋は事実経過として認められよう。頼朝が刺客を差し向けたとき、それは「法皇に対する明白な挑戦」<sup>58</sup>をも意味した。頼朝が義経討伐に動かなければならなかった理由と、義経と行家が挙兵する背景は、鎌倉方と後白河・義経・行家・奥州藤原氏の動向をまとめて考えなければならぬ。それらの考察はまた別の機会に行いたい。<sup>59</sup>

## おわりに

頼朝は義経と畿内近国の兵力による平氏追討を企図していた。しかし、法皇は義経を出陣させようとしなかったため、範頼と東国武士による平氏追討に変更した。この作戦には、安徳天皇の保護や九州武士の動員など、院の恣意の掣肘や西国での勢力拡大が意図されていたと思われる。

ところが義経が京都から出陣してしまった。そのため中原久経・近藤国平を上洛させて京都の守護の補強策とし、範頼には追討戦に励むように飛脚を発した。そして義経を京都に戻そうとしたと推定した。屋島合戦の事実が知られると、追討戦の無事と神器安全を範頼に伝えたが、壇ノ浦合戦で平氏は滅亡してしまった。義経の出陣と合戦が原因となって、頼朝の作戦は挫折した。

壇ノ浦合戦後、頼朝は従二位に叙されたので、追討を実行した義経の任官を推挙し、関東御使と東国御家人によって追討がなされたのだと主張した。しかし義経の自立とも受け取れる動きは許されるものではない。かつたので所領を没収した。そして、代官による追討成功と矛盾しないように、義経が伊予守に補任し、範頼が追討使の役割を終えた後、義経暗殺を図ったのである。以後、頼朝と法皇の対立も鮮明になった。

まとめの次に、『吾妻鏡』上での追討に関する記述の変化について記しておきたい。

まず、範頼による四国攻めや九州武士の動員が記されたA Bの実線部分である(X)。Xは合戦当時頼朝から範頼へ伝えられていた命令と考え、間違いないだろう。平氏追討の分担は、追討使頼朝の下、代官として義経が京都守護、同じく範頼が宗盛追討となされていた。これらは当時の記録と関わりをせられる。

次に、御使・代官・舎弟の派遣と御家人の参戦が述べられるD E Fの

破線部分である(Y)。Yは壇ノ浦合戦後に鎌倉方によって主張された。そして追討の賞も追討使頼朝と代官義経の關係に依りてなされた。だから義経も「奉<sup>二</sup>身命於君<sup>一</sup>、成<sup>二</sup>大功<sup>一</sup>及<sup>二</sup>再三<sup>一</sup>。皆是頼朝代官也<sup>⑥</sup>」と述べているのである。Yもまた同時代の日記より整合する記述がみつけれ

る。そして、九州・四国の分担が記されたACFの波線部分である(Z)。Zについて述べる前にXYZを経過どおりに並べてみると(左記)、X計画は、実際がそのとおりに記されず、壇ノ浦合戦後にY事後説明に転じたと認められよう。

A 正月 六日条 X・Z

B 二月 十四日条 X

C 三月 九日条 Z

※ 三月二十四日条 壇ノ浦合戦

D 四月二十一日条 Y

E 四月二十九日条 Y

F 五月 五日条 Y・Z

ではZをどのように考えるべきであろうか。九州・四国の分担が明記されてしまうと、当時の記録だけでなくX・Yとも関連させるのが難しい。そのため合戦当時に存在していた計画や戦い直後の説明として考えにくい。後年になって西海合戦を述べるときに考え出されたものである。XとYだけでは義経が平氏を追討したことになりかねないからである。Zは、義経が出陣した背景に頼朝の意向を想定する際の材料ともされるので、その解釈には注意しなければならない。

## 注

① 義経が院宣を奉じて(あるいは彼個人の判断で)四国へ向かったと述べ

る先行研究には以下のとおりがある。『大日本史』卷百八十七、列伝百十四、將軍家族一「源義経」。山路愛山『源頼朝』(東洋文庫、一九八七年。初刊一九〇九年)、二五二頁。平泉澄『物語日本史(中)』(講談社学術文庫、一九七九年。初刊(同『少年日本史』一九七〇年)、一〇七頁。中村善雄『判官源義経伝』(一九六六年)、一九七頁。笠榮治『知盛の最期』(赤間神宮叢書)三、源平シンポジウム、一九九二年)、四頁以下。拙論では、宮田敬三 a「元暦西海合戦試論」(『立命館文学』五五四号、一九九八年)、一一〜一四頁、同 b「都落ち後の平氏と後白河院」(『年報中世史研究』二四号、一九九九年)、四三〜四四頁、同 c「十二世紀末の内乱と軍制」(『日本史研究』五〇一号、二〇〇四年)、八一〜八二頁、同 d「屋島・壇ノ浦合戦と源義経」(川合康編『平家物語を読む』、二〇〇九年)、九八〜一〇二頁がある。研究史上の問題についてはあらためて述べたい。なお、本稿での西海は瀬戸内海とその沿岸地域との意味である。

② 宮田敬三「『覚禅鈔』『金剛夜叉法』と源平合戦」(中野玄三・加須屋誠・上川通夫編『方法としての仏教文化史』、二〇一〇年)、二七二〜二七四頁では、法皇は関東の源氏も西海の平氏も賊徒とみなし、調伏を企て、頼朝と平氏を戦わせようとしていたと述べた。

③ 田中稔「『鎌倉殿御使』考」(同『鎌倉幕府御家人制度の研究』一九九一年、初出一九六二年)、五五頁。田中氏は、「久経・国平が使節に任せられたのが二月五日で、義経の京都出發は二月十六日以前であることを考えれば、久経等の上洛は義経の後を受けて京都周辺を固めるためであったとして誤はなからう」(同上)とも述べ、正月十日の義経出陣には言及していない。

④ 五味文彦『源義経』(二〇〇四年)、一〇五頁、美川圭『院政』(二〇〇六年)、一七五頁、元木泰雄『源義経』(二〇〇七年)、一一〇頁など。

⑤ 渡辺保『源義経』(一九六六年)、一二六〜一四八頁、安田元久『源義経』(新装一九九三年、初刊一九六六年)、一八二〜二〇八頁など。

⑥ 三浦周行『源義経』(同『新編歴史と人物』岩波文庫、一九九〇年、初出一九一一年)、一二三頁、上横手雅敬『源義経』(平凡社ライブラリー二〇〇四年、初刊一九七八年)、九〇〜九六頁、同「いまなぜ義経なのか」(同編著『源義経 流浪の勇者』、二〇〇四年)、四六頁、河内祥輔『頼朝

- の時代」、一九九〇年、一五〇～一五二頁など。
- ⑦ 菱沼一憲「源義経の挙兵と土佐房襲撃事件」(『日本歴史』六八四号、二〇〇五年)、一七頁以下。
- ⑧ 元木注④著書、一四二～一五七頁。直近の同「延慶本『平家物語』」にみる源義経(佐伯真一編『中世文学と隣接諸学4中世の軍記物語と歴史叙述』、二〇一一年)、八八～九四頁では、頼朝は合戦後の義経を高く評価したが、その恩賞を義経や院は不満に思い、関係が破綻したとされている。
- ⑨ 範頼と義経が九州と四国の攻撃を分担する内容について、宮田注①a論文、一四～一八頁で、『吾妻鏡』が編纂されるときに付け加えられた解釈ではないかと述べている。これに関する補説を「おわりに」で行いたい。
- ⑩ 『玉葉』寿永二年七月三十日条。
- ⑪ 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』本文編下(一九九〇年。以下、『延慶本』と略す)第四「四宮踐祚有事付義仲行家ニ勲功ヲ給事」。
- ⑫ 『吉記』寿永二年十二月五日各条。
- ⑬ 『玉葉』寿永二年十一月二日、元暦元年正月十四日各条。
- ⑭ 『吾妻鏡』元暦元年二月二十五日条。以下、煩を避けるため、『吾妻鏡』を典拠とし、しかも検索が容易である場合は注記を省略する。
- ⑮ 『玉葉』二月二十二、二十三、二十九日各条。
- ⑯ 『延慶本』第五末「公家ヨリ関東へ条々被仰事」。この記事に注目した研究には、赤松俊秀「平家物語の原本について」(同『平家物語の研究』、一九八〇年、初出一九六七年)、二三～二四頁、上横手雅敬『日本中世政治史研究』(一九七〇年)、二一七頁以下、大山喬平「没官領・謀叛人所帯跡地頭の成立」(『史林』五八巻六号、一九七五年)、一二頁、杉橋隆夫「鎌倉政権の成立」(『歴史公論』通巻八号、一九七六年)、四六頁以下などがある。なお与えられた時期に異論が出されているが(石井進「平家没官領と鎌倉幕府」、『石井進著作集』第二巻、二〇〇四年、初出一九七七年、一五五～一五九頁)、本文で述べた解釈から三月七日の妥当性も考えられるのではなからうか。
- ⑰ 田中注③論文、五六頁、松井茂「鎌倉幕府初期の権力編成」(『歴史』五一号、一九七八年)、四二頁、久保田和彦「源義経の発給文書」(大三輪龍彦・関幸彦・福田豊彦編『義経とその時代』、二〇〇五年)、九六～一一〇頁、前川佳代「源義経と春日大社」(『立命館文学』六二四号、二〇一二年)など。
- ⑱ 宮田注①c論文で、義経は武士として初めて兵糧米停止を明言したと述べたが(七九頁)、平氏も官軍派遣を停止したり(同上七三頁)、義仲も兵糧米を停止しているので(長村祥知「木曾義仲の畿内近国支配と王朝權威」、『古代文化』六三巻一号、二〇一一年、一六頁)、「初めて」という評価はふさわしくなかった。
- ⑲ 『吾妻鏡』元暦元年三月十七日条では八日、『延慶本』第五末「公家ヨリ関東へ条々被仰事」では七日とされている。
- ⑳ 『吾妻鏡』元暦元年五月一、二日条。
- ㉑ 『玉葉』元暦元年二月二十三日条。
- ㉒ 金澤正大「甲斐源氏棟梁一条忠頼鎌倉管中誅殺の史的意義(II)」(『政治経済史学』四四六号、二〇〇三年)、四八～四九頁、野口実「源平内乱期における『甲斐源氏』の再評価」(佐伯注⑧編書)、四七六～四七七頁では、武田信義を屈服させる意図があったと述べられている。
- ㉓ 『玉葉』元暦元年六月十六日、十七日、二十三日各条など。
- ㉔ 『吾妻鏡』元暦元年七月五日、『山槐記』同年月八日、『玉葉』同年月日各条など。
- ㉕ 『山槐記』元暦元年八月六日、『玉葉』同年月日各条。
- ㉖ 上横手注⑥論文、四三～四四頁、菊池紳一「在京中の義経」(大三輪・関・福田注⑰編書)、六四～六六頁。
- ㉗ 『吾妻鏡』元暦元年九月十二日、文治元年正月六日、『百鍊抄』同年月二日各条。
- ㉘ 義経は二十六日(『吾妻鏡』文治五年閏四月三十日条)、範頼は二十九日(『吾妻鏡』元暦元年九月十二日条)に給わっている。
- ㉙ 『延慶本』第五末「参河守平家ノ討手ニ向事付備前小嶋合戦事」、梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』下(新日本古典文学大系、一九九三年。覚一本)、巻第十「藤戸」。
- ㉚ 元木注④著書、一〇四頁で指摘されている。
- ㉛ 『吾妻鏡』文治元年正月六日条。
- ㉜ 上川通夫「中世聖教史料論の試み」(同『日本中世仏教史料論』、二〇〇八年)

年、初出一九九六年）、三〇〇三三頁、横内裕人「密教修法からみた治承・寿永内乱と後白河院の王権」（同『日本中世の仏教と東アジア』、二〇〇八年、初出一九九七年）、一〇五〇一二八頁、宮田注①b論文、三六〇三七頁。

③ 具体的には、a 安徳天皇を皇位に復帰させる、b 皇位継承候補者として保護する、c 東国を迎える、d 平家領を確実に継承できるように役立たせる、などが考えられる。

④ 中村注①著書、二〇二頁。

⑤ 仮に頼朝による平氏追討が成就した場合、頼朝は何をしたかったのだろうか。たとえば上洛する好機にはなっただけか。合戦後義経に連絡を試み、失敗するとすぐに通信しなくなる（後述）こととも合わせ考えられる。

⑥ 以上、「大夫尉義経畏申記」（『群書類従』第七輯、六二八頁）。

⑦ 『吉記』 文治元年正月八日条。

⑧ 『吉記』 文治元年正月十日条。

⑨ 新城常三『鎌倉時代の交通』（一九六七年）、二七四頁以下。

⑩ 田中注③論文、五五〇五九頁、松井注⑦論文、三九〇四九頁、藤本元啓

「京都守護」（『芸林』三〇巻二号、一九八一年）、二〇〇二九頁、木村茂光「鎌倉殿御使下文の政治的意味」（同『初期鎌倉政権の政治史』、二〇一一年、初出一九九六年）、一一六〇一一八頁などによって指摘されている。

⑪ 『吾妻鏡』 文治元年正月十二日条。

⑫ 宮田注①d論文、一〇二頁では、義経を引き返させるように頼朝側より申し入れがあったのではないかと推測した。

⑬ 頼朝からの連絡は一ヶ月から二ヶ月近くかかって鎌倉に着いている（宮田注①a論文、一六頁）。参考として、博多・京都間の連絡に要する日数について、文永の役では十一〇十六日、弘安の役では約七日である（新城注③著書、二八三頁以下参照）。

⑭ 『平家物語』 諸本や『吾妻鏡』に記されている湛増の義経への協力は、事実として認めてよいと思う。

⑮ 東国を恋しく思う事例に、『吾妻鏡』 文治元年正月六日、十二日各条、頼朝より先に帰る事例に、五月五日（小山朝光）、五月八日（塩谷五郎）、

五月九日（渋谷重国）、八月二十四日（下河辺行平）各条がある。

⑯ 正月六日の書状に宗盛の生け捕りについて書いてあるので、書状には後年の加筆があるのではないかと考え方があつた（たとえば永原慶二『源頼朝』、一九五八年、一三三頁）。しかし、書状全体をみれば宗盛の生け捕りしか実現していないともいえるので、加筆の存在を疑わなくてもよいかもしれない。

⑰ 『百鍊抄』 文治元年四月二十七日条、『玉葉』 同年月二十八日条、『吾妻鏡』 同年五月十一日条。

⑱ 内閣文庫所蔵本（『新訂増補国史大系吾妻鏡』の底本、「北条本」）では「自専儀」は「自立之儀」となっている。「自立」は院宣を奉じて合戦し帰京した行動の表し方としてふさわしい。信綱への書状の趣旨の中で書かれているので文治当時の表現を伝えているかもしれない。「自専」「雅意」は頼朝との比較として地の文で書かれている（四月二十一日、五月五日、五月七日各条）。

⑲ 安田注⑤著書、一七七〇一七八頁。

⑳ 『玉葉』 文治元年五月七日、『吉記』 同年月日、『百鍊抄』 同年月日各条。

㉑ 『延慶本』 第六本「頼朝判官二心置給事」では、頼朝と義経は鎌倉で対面している。元木注④著書、一四三〇一四四頁、同注⑧論文、九三三頁参照。

㉒ 『玉葉』 文治元年六月二十二日条。

㉓ 『山槐記』 元暦元年八月十六日、『玉葉』 同年月日、『吾妻鏡』 同年月二十九日各条。

㉔ 『玉葉』 文治元年六月三十日条。

㉕ 『吾妻鏡』 文治元年十月二十日条。『玉葉』では二十六日に入洛とあり、十月二日には兼実より牛二頭を与えられている（各同日条）。

㉖ 元木注④著書、一六二〇一六三頁による。

㉗ 『玉葉』 文治元年十月十七日条、『百鍊抄』 同年月日条、『吾妻鏡』 同年月九日、十七日各条。

㉘ 上横手注⑥論文、四七頁。

㉙ 文治元年十月以後に関する拙論として、「鎌倉幕府による源義経追討」（『ヒストリア』一七三号、二〇〇一年）、一七七頁以下がある。また、院

と頼朝の対立については、宮田注②論文、二七五～二七七頁でも言及している。

⑥0 ただDEF破線部分が壇ノ浦合戦後まもなくに出揃ったとも言い難い。これらの中でもEは文治当時の表現に近いのではなからうか(注④8)。義盛が範頼に景時が義経に侍所として従っていたという記述(D)に対する疑問については、宮田注①a論文、一五～一六頁で述べている。

⑥1 『玉葉』文治元年十月十七日条。また腰越状では「被<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>御代官其一<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>勅宣之御使<sub>一</sub>、傾<sub>二</sub>朝敵<sub>一</sub>」(『吾妻鏡』文治元年五月二十四日条)と表現されている。

⑥2 『大日本史』卷百七十九、列伝百六、將軍一「源頼朝上」・「源頼朝下」では、範頼が九州の軍事を、義経が四国の軍事を総督したとも記されている。

る。山路注①著書、二五二頁には「範頼を以て九州の軍務を管し、義経を以て四国の軍務を管せしむることと定め先づ範頼をして発せしめ、義経には時期の熟するを待て四国に進発すべきことを命じたるもの、如し。  
東鑑に義経は兼て頼朝より此訓令を受け居たりしを以て今年(一一八五年)正月の初には既に其の出発すべき時機なるを察し平氏追討の為に四国に下らんことを請へり」とある。龍肅「源平合戦」(高柳光壽編『大日本戦史』第一卷、一九三七年)、二二七頁では「頼朝は範頼を督励すると共に再び義経を起用すること、し、範頼には九州方面、義経には四国方面の軍事を担当させることとした」と書かれている。

(河北印刷株式会社臨時社員)